
愛の表し方

水中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の表し方

【Nコード】

N7959H

【作者名】

水中

【あらすじ】

27の僕と、73の彼女。そんな歳の離れ過ぎた二人がふとした事から出会い、そして結婚する。周囲からは当然のように金目当ての結婚と思われていた。彼女もそう思っていた。だが僕の本心は違っていた。皆が皆理解できるような愛のカタチ以外の不器用な愛のカタチも存在しうるのでは、そんな事を投げかけたストーリー。

出会い

僕には73の妻がいる。
ちなみに僕は27である。

僕たち二人の関係を初めて知る人は皆同じことを考えているのだろ
う。

『絶対金目当ての結婚だよ』と。

しかし、言い訳ではなく、本当に僕は彼女のことを愛おしいと思い、
結婚を決意した。お金なんて全く関係ない。まして、今は亡き彼女
の前夫が貿易商の社長であったことなどどうでもいいことである。

ただ、周りはどう言おうとそれを信じてくれないし、むしろ力説す
るのも馬鹿馬鹿しい。何故なら、自分が逆の立場でもそう思うであ
ろうからである。

彼女は亡き前夫の後を継ぎ、会社社長を司っている。一方、僕は中
小企業のしがないサラリーマンである。
そんな一見接点がなさそうな二人が出会ったのは本当に偶然のこと
であった。

その日、僕は会社からリストラを宣告された。理由は会社の経営不
振であった。

うなだれながら、トボトボと歩いて帰っていたのだが、ふと帰り道
の公園が目にとまり、何気なくそこにあったベンチに腰を下ろした。
それからいくらかじつとその場に座っていたら、頬を何かポロポ
ロと伝うように感じていた。それを拭う気力さえなかった。

あれはきつと会社への愛着とか、裏切られたといった感情で溢れ出
たものではなく、認めさせる力が自分にはなかったことへの自分に

対しての不甲斐なさに溢れ出てきたものであるう、と思い返した時に後で感じた。

そんな僕の前に、さっと人影が現れ、ハンカチがすつと差し出されていた。

顔を上げると、年の割に小綺麗な格好をしている年配の女性が立っていた。

それが彼女との出会いだった。

僕は差し出されたハンカチをそつと受け取り、こぼれ落ちるモノをそつと拭った。

「何かあったんですか？もし私でもよければ、お話相手くらいにはなれますよ」と、彼女から口を開いた。

「実は会社が経営不振で、リストラを行っていく中でその対象者になりました、今日最後の業務を終えてきたところです」

「そうだったんですね。お辛いでしょね、きっとその会社で頑張つてこられたんでしょう」

「いえ、それで言うと同張りが足りなかったのかもしれませんが。」
「そう思うのであれば、次のお仕事でより精を出して頑張つたらよいではないですか。お若いんですもの。まだまだ何回でもやり直しは利くと思いますよ。亡くなった主人も若い頃は色々と失敗を重ねて、何十年かけて少しずつ会社を安定稼働させていったんですよ」
そう言った彼女は僕に一粒の大きい飴玉を手渡した。

「どうぞ。甘い物食べると、人って元気でいれますから。現に私も元気に毎日過ごしてますしね。」

そう言つて少し笑つた彼女の表情は、シワこそ多くあるけれど、本当に素敵で、そして可憐な表情を見せていた。

その顔を見たら何だか顔が緩んで、自然と自分にも笑顔が生まれていた。

「そう、その顔。その顔でいらしたら、きつと良いお仕事にまた恵まれますよ」

「ありがとうございます。何か少し元気出ましたよ。」

「それはよかった。では私はそろそろ失礼させて頂きますね。ごきげんよう」

そう言っで女性が去ろうとした時、自然と口が開いた。頭ではなく、身体が反応したようだった。

「待ってください。あの、お名前教えて頂けませんか。それとできたら電話番号も。何かこのままでこの出会いを終わらせたくないんです。友達、っていうのは失礼かもしれませんが、これからも相談相手になってくれませんか。もしご迷惑なら諦めますけど」

「喜んで、こんなオババでよろしければ。名前は倉田陽子。電話番号は赤外線と交換できますか」

「赤外線!?だ、大丈夫です。赤外線できます。交換しましょう」

「私が赤外線知ってるのがそんな驚いてしまいます?まあ無理もないですよ、こんなオババからそんな言葉出たら。でもそのくらい知ってるんですよ。ところで貴方様のお名前は?」

「すみません、忘れてました。多賀巧と言います。」

「巧さんね、良いお名前ですね。・・あつ、もうこんな時間、行かないと。赤外線しましょ」そう言っで、彼女は慣れた手つきでセツトして、僕の携帯に送信した。

「あとで空メール送っで頂けたら、返信させてもらいますね。ではまた」

そう言っで彼女は近くに停めてあった車に乗り、颯爽と去っでいった。

番号を交換したものの、また会うことになるのか、増してや結婚相手になることなど、その時には想像することすら僕には難しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959h/>

愛の表し方

2010年10月29日13時26分発行